

宇多津新都市開発

宇多津新都市開発は、塩田跡地を利用して、瀬戸大橋の四国の玄関口にふさわしい新しい時代の都市を建設するために、香川県、宇多津町、地域振興整備公団（地域公団）が一体となって進めた事業です。

宇多津町では、江戸時代中期から始まった塩田が明治以降に本格化し、日本一の塩の町と言われるほどになりましたが、製塩技術の進歩に伴い昭和 47 年に製塩業は全面的に廃止され、186ha に及ぶ塩田が残されました。ここで着目されたのが、塩田跡地を瀬戸大橋の効果の受け皿として活用しようとする宇多津新都市開発の構想でした。

昭和 52 年に第三次全国総合開発計画の中で、本四架橋 3 ルートのうち児島・坂出ルートを優先着工すること、瀬戸大橋を道路鉄道併用橋とすることが明記されました。四国側の起点駅は宇多津町内に設けられることになり、宇多津新都市開発構想は瀬戸大橋の関連プロジェクトとして進められていくことになりました。

昭和 52 年に香川中央都市計画事業宇多津塩田土地区画整理事業を香川県知事が認可した後、香川県と宇多津町は地域公団に事業への参画を要請しました。地域公団が施行する地方都市開発整備等業務は 300ha 以上の規模を原則としていましたが、宇多津新都市は瀬戸大橋という国家的プロジェクトの関連事業であることなどから、国土庁及び建設省から地域公団の参画が認可されました。

昭和 53 年から用地買収交渉、漁業補償交渉、整地堤防補強工事などが行われ、昭和 57 年には塩田跡地の整地・埋立て工事が完了しました。埋立て土地造成に使った土砂量は、沖合の海底からの浚渫海砂 444 万 m³と備讃瀬戸航路からの浚渫揚土 144 万 m³の合計 588 万 m³で、11 トンダンプに換算して 100 万台に及ぶ大工事でした。さらに公共下水道工事、道路整備工事、公園工事などが順次行われ、平成 2 年度に全体の造成工事が完了し、平成 3 年には市街地区の核となる企業誘致、施設誘致も完了して、事業竣工式が行われました。

総面積 186ha、計画人口 8,700 人の宇多津新都市は、JR 宇多津駅を中心に商業ゾーンや情報サービス機能などの中枢管理機能を集結し、その周辺には緑豊かな住宅地が形成され、臨海部には瀬戸内海国立公園の美しい景観を生かした観光・レクリエーションゾーン、東側には立地を生かした流通ゾーンが配置されています。

宇多津町の人口（国勢調査）は平成 2 年から令和 2 年にかけて 30 年間で 12,807 人から 18,704 人へと 1.46 倍に増加し、宇多津町の財政力指数（平成 29 年度～令和元年度の 3 年平均）は 0.89 で県内第一位です。宇多津新都市開発は宇多津町だけでなく中讃地域の発展にも貢献しており、四国の玄関都市として一層発展することが期待されています。

＜参考文献：宇多津町企画「新宇多津都市のあゆみ」1991 年、地域振興整備公団新宇多津都市開発事務所企画「新宇多津都市開発整備事業のあゆみ」1991 年など＞

